詩とことば
信

著者紹介

大岡信（おおおか・まこと）

1931年，静岡県三島に生れる。東京大学国文科卒。詩人，明治大学教授。著書に，総合詩集『大岡信詩集』（1968年思潮社），『紀貫之』（1971年筑摩書房），『本が書架を歩みでるとき』（1975年花神社），『悲歌と祝禱』（1976年青土社），『詩への架橋』（1977年岩波新書），『うたげと孤心』（1978年集英社），『春少女に』（同年書肆山田），『折々のうた』（1980年岩波新書）など多数。なお『大岡信著作集』（全15巻1977～78年青土社）が完結した。

＊詩（し）とことば

1980年10月30日　初版1刷

定価1400円

著　者　大岡　信

装　幀　著　者

発行者　大久保憲一

発行所　株式会社花神（かしん）社

東京都千代田区猿楽町2—2—5　興新ビル605　〒101

電話　東京・291・6569　振替　東京2—194949

印刷・信毎書籍印刷＋コーエー

製本・今泉誠文社　用紙・文化エージェント

0095—800110—1092

©MAKOTO ŌOKA

Printed in Japan

詩とことば

大岡信

花神社

目次

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

詩とことば――9
古典と現代詩――29
言葉と人格――58
最初に選んだ表現形式――65
詩と批評の根拠――71
*
聞き書きとは編纂のこと――105
『うたげと孤心』について――110
連詩・連句の場から――114
歳時記のおもしろさ――129
*

短章七つ

泉よ　よみがえれ――139
負けるが勝ち――141
因縁ばなし――143
大正詩の中の科学と化学――145
奈良橋――147
もう一度行ってみたい――148
墓参り――150

*

本を読む

『文車日記』について――151
『空海の風景』について――157
『建礼門院右京大夫』について――164

*

言葉に花を咲かすこと――171
世阿弥の「花」――180
『万葉集』南限の歌――200

あとがき――214
初出一覧――216

詩とことば

詩とことば

ことばというものを一般論として考えるということは、本来たいへん難しいことですが、詩のことばに即しつつなるべく一般性を持った問題について考えてみたいと思います。

詩を書いていてよく訊かれる、そして自分でも答えにくい問題の一つは、作者の意図したところと読者の読み方とのギャップの問題です。自分が自作に感心しているほどには他人(ひと)は感心してくれないし、どうやらわかってさえいないらしい、こういう悲しき経験を持っている人はたくさんいると思います。たまにはまた、自分で意図したところよりはるかに豊かな読みをしてもらったということも、まあ稀れにはあるでしょう。そんな場合は、びっくりしながらも嬉しいような不思議な感じになる。逆に自分が勢い込んで書いたにもかかわらず、全然そのメッセージが届かないという場合もありますね。そういう時には何だか腹が立つ。しかし、誰に対して腹が立つの

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

かわからない。結局、自分が悪いわけなんですからね。

ことばというものは、まず伝わるか伝わらないかという問題があるんですね。これは詩を書いている人だけではなくて、文章を書くすべての人にとって常に大きな問題でありますが、とりわけ詩の場合に大きい問題となります。散文家においても同じ問題はありますけど、散文でそれが大問題になる可能性は、まあ、詩よりは少ないというのが普通じゃないかと思います。詩というのは、伝達の可能性という点については常に問題性が大きい形式のように思うんです。もちろん、ことばというものはそんなに伝わるものではないんだということを、初めから前提して書く立場に立ってしまえば、問題は逆に簡単になってしまうでしょう。しかし、当り前のことを言いますが、ことばというのは、結局のところ伝わらないと困るんです。

ことばが発生した根本のところにかえって考えてみます。人が単独で地上に突如出現したとしたら、その場合には、ことばというのはありえなかったでしょう。ことばは少なくとも二人以上の集団の中でしか発生もしなかったし、存在もしなかったはずです。もちろんことばが声として現れた時には、叫び声のようなもの、呟きのようなものとして発生したのでしょうけれど、それが本当の意味で〝ことば〟といわれるものになるためには、そこに複数の成員から成る、いくつかの重要な点で共通の基盤を持った社会が成り立っていなければならない。

問題をはっきりさせるために例をあげれば、ここに突如として宇宙人がやってきたとします。その宇宙人がことばを持っているかどうかということは、何にもまして大問題ですね。宇宙人と

ぼくとの間に何らかの意味で繋がりを保とうとする場合には、ことばというものが必要になるわけです。その場合、宇宙人がはたしてことばを持っているかどうかということを知るために、ぼくがいくつかの物を示して単語を発したとします。単語に関連した物を示して、関連したものであることをわかるようにしておき、これと繋がりあるもう一つ別のものを示して、別のことばを発してみます。もし向こうで、最初のものに対して××××と言い、別のものについて×××、○○○○というふうに言ったとしたら、そこにあるシステムが存在していることがわかるわけです。つまりこちらでは物体Aと物体Bの間に言葉の上で何らかの繋がりがある。一方むこうが発声するわけのわからない音の繋がりについても、ある音と別の音が必然的に繋がっているということがわかる場合には、この連中はことばを持っているということがわかるわけです。言い換えると文法がありシンタックスがあるということなんです。ぼくと相手の間でいわゆるコミュニケーションが成り立つ可能性がそこで初めて出てくるわけです。

ここでぼくがある一つの単語だけを発して、向こうが全然関係のない単語をパッと発声しただけでは、向こうが言葉を持っているかどうかということはわかりません。こちらのことばに文法によって統合された一つの体系があり、向こうにもその体系と対応する別個の体系があるということになれば、彼と意思を通じ合わすことも可能になるでしょう。宇宙人がそれを「意思」と考えるかどうかは知りませんが。とにかくこういう一定の現象については必ずこういう一定の音のつらなりを発してくるということがわかれば、相手に、われわれの言うところの「ことば」があ

ることがわかり、そこで対話の可能性も考えられてくるというわけです。それによって初めてことばというものが、本質的な意味でお互いの間に存在するということがわかります。われわれが口から発する音がことばになるためには、そこに意味が含まれていないといけないわけですね。意味がそれぞれのことばの文法によって統一されていなければならない。そういうわけで、ことばというものは、それそのものとしても秩序ある集団として初めから存在し、しかも人間の集団の中で機能するものだということになります。ぼくが何かを言った時に、聞いた人はそれについてとにかくわかる。わからないとことばとは言えない。ぼくが何かを言うときは、それを受け止めてくれる人がいるということを、ぼくは想定しているわけです。

ところが次に問題になるのは、ことばというものは、一体完全に伝わるものなのかどうか、ということです。ことばというものは完全に伝わるものじゃないと思います。論証抜きで言ってしまいますけど、これは体験的にわかることです。たとえば長いあいだ隠してきたことを、無理を押して公表したとします。それが意外にも周りの人にはありふれたふつうのこととして受けとられたとします。これはよくあることですが、その場合、ことばが完全に伝わったと言えるのか。もちろんことばの意味は伝わって「そうだったのかい」という返事が返ってきたとしても、逆に、そんなに簡単にわかってたまるか、とこちらは思う。ずいぶん勝手な話だけれど、これもまたよくあることです。そういう場合、ことばは伝わっているけれど、また伝わっていないということになるわけです。

そういう意味では、ことばというのはどうも非常に扱いのむずかしいものだ。完全に伝わるものでもないけれど、全く伝わらないものでもない。しかし、そういい捨ててしまうだけでは、話はすみません。話を単純にするため、日常生活の中でのことばを考えてみますと、ことばにはとにかく普遍的に伝わる部分というのが、あることはたしかです。たとえば「わたしは×××へ行きます」ということばは誰がきいてもその人が×××へ行くという意味が伝わります。ところがこれを語順をひっくりかえして、「行きます、私は×××へ」という言い方をするとします。そうすると、これはもうかなりいろいろな意味を含んでくる。これを発した時の状況いかんによって、ここにこめられた感情の強さ弱さ、方向、角度、おおいに違って受けとれます。「私は、行く。」というのと「行く、私は。」というのとは非常に違う。「行く、私は。」と言った時には、怒って言ってる場合もありましょうし、喜んで言ってる場合もありましょう。男あるいは女が、相手に裏切られたか何かして、「行く、私は。」と言って飛び出す場合もあります。「私は、行く。」と言う場合とでは、そこにこめられた主体の思考・感情内容が違います。人間というのは、意味の面で生きていると同時に、感情の面で生きてますが、この感情の面というのが、ことばではなかなか正確に伝わりにくいんですね。「私は、行く。」というだけだったら、どこへ持っていっても「私は、行く。」という意味は伝わるのですけど、「行く、私は。」と言う時には、状況のいかんでいろんな意味が生じうる。必ずしもすべて伝達できないかもしれない。

じつはこのようにして考えられたことばの問題が、詩の問題としても大きなものになると思う

んです。散文の場合には「私は、行く。」あるいは「行く、私は。」と書いてあっても、そのニュアンスの差異は、前後に「そのときAはBに向かって、タバコの吸殻を投げつけながら叫んだ」というような文章があればわかるわけですけど、詩の場合、そういうことは必ずしも説明されない。「行く、私は。」の下に「！」がついてるだけかもしれない。読者のほうはいろいろ考えるわけです。考えないとこのことばが何を意味しているかわからない。なかには芸がまずいためにわからないだけの詩もありますけれど、また非常にいい詩もあるのです。

散文の場合、論理的な意味の領域が、相対的には非常に大きいけれども、詩の場合には非論理的な意味の領域が大きいんですね。非論理的な意味の幅が大きい。その幅の中でいろんな書き方を詩人たちがします。読者としては、ある詩人に惚れこんで、その人の作品をたくさん読んでいくと、自然にその詩人の持っている感性の論理が、非論理的なことばを使ってあっても、つかめるようになります。この詩人はこういう感受性のあり方において、こういう非論理的な書き方をしているんだということがわかります。しかしたまたまアンソロジーのようなもので一篇の詩を読んで、わかろうとするときには、むずかしい問題にぶつかります。たまたま出会った詩をたいへんに誤解しちゃって、感激してすばらしいと思ってしまうというようなおかしいことも生じる。それが決して無意味ともいえない場合もあるから、面白いのです。

どこかに引用されていた、ある詩人の作品のある一節だけを見てすばらしかった、それが忘れられないという経験は誰にでもありましょう。ところがじつは、その一節は作品全体の中ではど

うっていうことない一節だったりする。引用した人が非常にうまく引用したんですね。批評の醍醐味というものは、引用の妙技にあると言っていいようなところがあるので、そういう見事な引用をして、読者が引用された詩を見ただけでその詩人の名前を永久に忘れないということになれば、その引用術はすばらしかったわけです。いずれにしても詩のことばの問題にはそういうこともあります。

とにかく、ことばを考える上では、とりあえず論理的な意味が伝わればいいということばの領域と、それではすまされないことばの領域があるということは認めなきゃならないと思います。論理的なことばはどういうふうに了解されるかと言うと、「このお金で○○○へ行って×××を買ってきて下さい」と言われて、言われたとおりのものを買ってくれれば、その瞬間に「買ってきてくれ」と言ったことばは消滅していいわけです。ことばは相手に全面的に伝わっているわけです。それが行動の結果としてわかるわけです。

ところが結果を見てもわからない領域がある。たとえば先ほどから言っている感情の領域ですね。感情とか感覚とかいろんなことばで言いますけど、広く言って感性、sensibility の領域です。この領域で用いられることばというのは相手にどう伝わったか、結果が必ずしもはっきりしません。絶対こういうふうに受けとってもらえるはずだ、と思って書いた詩が、全然違って受け止められるということがありうる。なぜかというと、詩人は意味のあることばを用い、できるかぎり論理的に構成して作ってもいるつもりなんですが、彼が実際に目的としているのは、単なる

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo